

福島県浜通り地域における複合災害の記憶と表象

—文学研究の立場から—

Memories and representations of the complex disaster in the Hama-dori area
of Fukushima prefecture
—From the viewpoint of studies of Japanese literature—

五味 洵 典嗣¹

¹大妻女子大学文学部日本文学科

Noritsugu Gomibuchi¹

¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：東日本大震災，文学，歴史，記憶

Key words : 3.11 earthquake, Literature, History, Memory

抄録

東日本大震災・東京電力福島第一原発事故以後，日本語の文学研究・文学批評の場面でも，核や原爆を描いた過去の作品の読み直しがさまざまに進められている。しかし一方で、「ヒロシマ」「ナガサキ」という符牒と同様，カタカナで「フクシマ」と表記された記号のもとに，現時点でどのような言葉やイメージが呼び集められているか，という検討は決して十分ではない。日本政府は2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて，震災と原発事故を乗り越えた「復興」という名の「国民の物語」を作り上げようとしているが，まさにそれは，被災者や地域のとまどいを端折るような事態ではないか。本稿では，福島県浜通りにおいて，地域社会として震災以前・以後の記録と記憶をどのように保全し，それらをどのように表象・表現しようとしているか，まさにその現場での試みや企てに触れる中で，文学研究者として考えたことを述べたものである。

1. はじめに——問題の所在

木村朗子「五年後の震災後文学論」(『新潮』2016年4月号)は、『震災後文学論——新しい日本文学のために』(青土社，2013年)の著者が，〈戦後70年〉というもう一つの節目とも重なった五年後の「フクシマ」を考えるためのアプローチについて考えたエッセイである。

木村は，ドイツの作家で，チェルノブイリ原発事故による立ち入り禁止区域に取材した小説の作者でもあるメヒティルト・ボルマンの語を引きながら，「フクシマを経て，あらためてチェルノブイリの物語が求められるようになった」と概括した上で，「文学のなすこと」とは，2015年のノーベル文学賞作家スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチ『チェルノブイリの祈り』がそうしたように，「事故の原因に向かうのではなく，人生の中途に方向転換を余儀なくされた人々の暮らし」に焦点

を当てることではないか，と書き記す。

エッセイの末尾で，〈戦後70年〉の2015年に，中国人の視点で南京虐殺を書いた堀田善衛の問題作『時間』が再刊・再評価されたことに触れる木村の意図は，さしあたって明らかだろう。過去に核や被爆／被曝を主題に書かれたテキストを，「震災後」の〈いま・ここ〉を考えるためのアーカイブとして活用すべきということだ。木村が別の論文で用いた言いまわしを借りるなら，「ヒロシマ・ナガサキ」「ミナマタ」「9・11」といった世界史的な出来事との連関の中で，「フクシマ」を思考すること。木村にとって「つまりフクシマという論題は，歴史を引き受けること」なのだ^[1]。だからこそ「五年後の震災後文学論」での木村は，おそらくは各地で伝えられる原子力災害避難者に対する心ない誹謗や中傷を念頭に，1953年の映画『ひろしま』(関川秀雄監督)が描いたシーンを，

「歴史的な惨禍を個のうちに封じこめ、かつまたそれを罪だと感じさせる」「政治的なトラウマ化」の先行事例と位置付けるのだし、1965年の井伏鱒二『黒い雨』を、核の不吉なイメージと「死者をもものともせず」に繁茂増殖する不気味な緑」とが共存する情景の先蹤として呼び出していく。いとうせいこうの小説『想像ラジオ』（河出書房新社、2013年）が印象的に描き出した死者との交渉という主題は、広島原爆投下の際、父を見殺しにしても生きねばならなかった娘と父の霊魂との対話という設定を持つ井上ひさし『父と暮らせば』（新潮社、1998年）の系譜に結びつけられる。いってみれば木村は、「震災後」という観点から、核／原爆／戦争を描いた過去のテキストと出会い直し、その中から「震災後」の現実を生き抜くための指針を読み出すこと、さらにそこから、そうした破局的な出来事にかかる体験と記憶を保持・保存する一つのメディアとして「文学」を再定義しようと企んでいる、と言えるのだろう。

確かに、2011年3月からこのかた、日本語の文学研究・批評でも、さまざまな場面で、核／原爆／戦争をテーマとするテキストの読み直しと再評価が行われてきた。「とくにゾーンと呼ばれて立ち入りを禁じられた土地に元々住んでいた人々が、あれからどのようにして生きていったかを数値や統計ではないかたちで知り得るチェルノブイリの物語は、フクシマの今後を照らす先例となるはずだ」と記す木村がどんな「物語」を念頭に置いているかは書かれていない。だが、日本政府や福島県やその立場に立つ論者たちが「チェルノブイリ」という記号を恣意的に運用することで、1986年の原発事故と補償の仕組み、健康への取り組みにかんする知見を参照する道すじ自体を妨げてきた以上^[2]、「チェルノブイリ」事故のあとで生きて／生きる人々の経験を描いたテキストから学ぶことは、いまなお重要だろう。だが、それ以上に大切なことは、あるいは、まず確認しなければならないことは、（それ自体がある種の符牒でもあるかのように）カタカナで「フクシマ」と表記された記号のもとに、〈いま・ここ〉で、いったいどのような言葉やイメージや物語が呼び集められているか、ということではないか。

人間身体は放射性物質から放たれる放射能を知覚・感受することができない。こうした核被害・原子力災害の特質は、ひとびとの不安をかき立て

ただけでなく、表象やイメージの吟味を難しくさせることで、さまざまなレベルでの対立や葛藤を生み出す要因ともなってきた。とくに低線量被曝の場合は、いつどんな影響があらわれるのか、そもそもどんな影響があらわれるかに個人差があつて、そのリスクを一概には論じきれないところがある。また、低線量被曝という点でいえば、福島県内だけが問題となるわけではまったくない。ある意味で「フクシマ」という記号化は、その言葉で名指された場所を他者化することで、あたかも東京を含む関東圏が放射性物質による環境影響から無関係であるかのような印象を構成する役割も担ってしまっている。

2011年3月以来盛んに語られ、いまも語られている「風評」という語をめぐる意味の抗争が端的に示しているように、東京電力福島第一原発事故による被害被災をどう語り、どう表象するかは、現実の放射性物質による汚染とは別のレベルで、深刻な問題の焦点であり続けている。核被害・原子力災害——この言い方がすでに表象だ——を誰が、どの立場から、誰に向けて、どんな言葉で、どんな文脈において語るのか。森岡卓司は、日本語の知的言説の場における「二〇一一年三月以降の「言葉」の失調」は、「ポストモダン以降の言説状況」にあつて、語る行為を正統化／正当化する契機としてあつた「当事者性」という概念が決定的に揺らいでしまったことに起因する、と述べる^[3]。この出来事の当事者とは誰なのか、誰が語る資格を持っているのか——。なるほど、そうした自問をこそ語ることの倫理と考えるなら、事態と誠実に向き合おうと思いなすほど（かつての小林秀雄がそうだったように）沈黙を選ぶより他にない。そうした自問と反省を欠いたように見える言葉やイメージに対しては、それを言語化することもやはり表象である以上、違和と鬱屈を抱えながらも、重苦しい不同意か諦念の表情によって対応するしかないだろう。しかし考えるべきは、にもかかわらずひとは、言葉やイメージを生産することをやめたわけではまったくない、ということだ。

表象の危機は、新たな変革に向かう契機ではなく、既存の秩序を揺さぶるリスクと感知された瞬間に、どうかして糊塗しなければならない綻びとして意識されるようになる。そのように判断された瞬間に、通常では考えられないほど多くの資本と人的資源とが投入されて、膨大な量の表象が生

み出されていくだろう。その圧倒的な物量を受容し消費するだけで手いっぱいになってしまった人々は、いつしかその表象にげんなりと飽き果て、何も言わずともわかった気になって、その表象について真剣に思考することから遠ざかってしまう——。ひとは確かに物忘れをする存在だが、より厄介なのは、記録や記憶が固定化し紋切型化することによって進行する忘却の問題だと稿者は思う。誰もがそれを知っていると思っているが、実際には誰もがほんとうにそれを知っているわけではまったくないこと。そのように考えを進めてみるならば、東京電力福島第一原発事故による被害被災と、日本語におけるアジア・太平洋戦争の戦争記憶の問題とを接続する回路を開くことができる。

稿者は近年、日中戦争・アジア太平洋戦争に関わる文学テキストや従軍体験記・ルポルタージュを対象に、日本語の文脈に刻まれた戦争と戦場の記憶を再検討する研究を集中的に行ってきた。また、それと並行するかたちで、地域社会が日本国家・日本軍隊・日本企業による戦時期の加害の記憶とどう向き合い、どのように記録・記憶してきたかを検証する調査も続けてきた。いわゆる〈先の大戦〉をめぐる日本社会が紡いできた戦争体験・戦争記憶の語り、戦前・戦時の帝国意識をひそかに保持するかたちで、戦後日本のナショナリズムを構築する重要な資源となり、〈戦後復興〉を下支えするエンジンとして機能してきた一方で、その過程で行われたあからさまな記録と記憶の選別の結果、日本社会の内部だけでなく、近隣のアジア諸国との対立・分断の火種となり続けてきたことは、すでに多くの論者が指摘してきた。そして再び、東京電力福島第一原発事故をめぐる記録と記憶は、日本政府と経済界とその立場に立つ者たちによって政治的に設定された目的＝終わりとしての東京オリンピック・パラリンピックへと向かう、〈国民〉の〈復興〉の物語にとって不可欠の一章として、位置付けられようとしている。

山本昭宏は、1945年以降の日本語における核をめぐる言説と物語を通史的にたどった著書の中で、「福島原発事故を経験したからこそ、今度こそ原発を安全に運用していくことができるという論理」が、敗戦後の「被爆国だからこそ原発を推進すべきだ」という原子力平和利用を正当化した論理の反復ではないか、と指摘している^[4]。こうした動向を批判的に検討する意味でも、地域社会が、

ナショナル・ヒストリーとは異なる位相で、この複合災害以後の時間をどのように記録し記憶するかは、喫緊の課題であると考えられる。本稿は、福島第一原発事故以後の原発事故被災地における記録と記憶、イメージと表象の政治の現場で思考する方々との出会いから、文学研究者として思いめぐらせたことらについて述べたものである。

2. 記録をつなぐ、記憶をつなぐ——福島県富岡町の試み

2016年3月9日、稿者は友人と連れ立って、福島県いわき市のいわき明星大学キャンパスへと向かった。福島県富岡町の学芸員で、同町「歴史・文化等保存プロジェクト・チーム」の三瓶秀文・門馬健両氏から案内をいただいた企画展「富岡町の成り立ちと富岡・夜の森 同時開催・富岡町震災遺産展～複合災害とこれから～」(2016年3月9日～3月14日、会場：いわき明星大教員談話室・エントランス、主催：富岡町・富岡町教育委員会、共催：ふくしま震災遺産保全プロジェクト、後援：いわき明星大学)を見学するためである。

企画展の会場は3つのブロックに区分され(「I 富岡のあけぼの～遺跡の分布と各時代～」「II 富岡町誕生へ～近世・近代の富岡と夜の森開拓～」「III 地域資料と震災遺産保全～富岡町の試み～」)、この地域における旧石器・縄文時代、古墳時代から奈良時代にかけての各種考古資料から始まり、近世から近代にかけての地域の名望家や地場産業関係の記録、生活の営みを伝える民俗資料など、見学者が「地域資料」とは何かを想像し理解することができるよう、展示にも工夫が凝らされていた。いわき市は富岡町民の主要な避難先のひとつだったが、一連の展示構成からは、東京電力福島第一原子力発電所事故によって避難を余儀なくされた町の来歴をあらためて確認し、その文脈の中で2011年3月11日以降の時間を捉え返そうとする意図をうかがうことができた。

福島県浜通り地域の中央部に位置し、東京電力福島第二原発の立地自治体でもある富岡町は、東日本大震災時、巨大地震・大津波・原発事故という人類史上例のない規模の複合災害に見舞われた。町民が県内外に先の見えない避難を続けている中、三瓶・門馬両氏は、「富岡」という町の歴史と記憶をつないでいくことで、町民や町ゆかりの人々の

〈根〉を守り、時間と距離を隔てても町との〈縁〉を想起するよすがをつくるべく、町内に残された文化財や各種史資料の救出作業に尽力されてきた。町役場当局を説得しつつ、町を襲った複合災害とそれ以後の町の情景を、最新技術なども駆使しながら、さまざまな手段でアーカイブ化する試みにも着手されていた。2014年6月には、三瓶・門馬両氏が中心となって、町職員をメンバーとする「歴史・文化等保存プロジェクト・チーム」（以下「歴史文PT」を略記する）を立ち上げ、福島大学とも連携を進めながら、2016年10月時点で12,000点に及ぶ史資料の保全・整理作業が行われている^[5]。つとに富岡町は、2015年6月に「富岡町災害復興計画（第二次）」を策定、早ければ2017年4月の帰還開始を目指すとして表明したが^[6]、そこでは「帰還する／しない」だけではなく、「いまは判断しない」という「第3の道」を選択肢として掲げ、「どの道を選んでも、ふるさとに誇りを感じ、富岡とのつながりを保ち続けられる町」を作ること、そのためにも、町の歴史・文化・記憶・震災関連遺産の集積と保全に努めることが明記された。富岡町のプランは、経済基盤・生活インフラだけでなく、地域の歴史・文化・記憶という人文知が果たす役割を重視し、「復興計画」に積極的に組み入れている点で、たいへんユニークだと言える。

稿者が先述の企画展会場を訪れた際、多忙な業務の合間を縫ってギャラリー・トークをしてくださった門馬氏の言葉の中で印象に残ったのは、「震災遺産」の一つとして展示された、埃と泥をかぶった二つの時計にかんするお話だった。ひとつは、富岡駅前美容店の店先に取り付けられていた電気時計。針は14時47分を指しており、これは、富岡地区が14時46分の地震発生直後に電源を失っていたことを示す物証となる。もう一つは、その美容室の二軒隣りにあった薬局の電池式時計で、針は15時37分で止まっている。気象庁のデータによれば、近隣のいわき市小名浜に津波の第一波が到達したのが15時8分、最大の高さの波が15時39分。展示パンフレットの説明にも、「富岡駅前の津波第一波時には時計は壊れておらず、第二波以降に浸水したこと、恐らく第一波より第二波の方が浸水が深いことなど、様々なことが読み取られます」とあった。

つまり、福島県浜通りにあって、大ぐくりに〈3・11〉と総称されている未曾有の複合災害

の起点は一つではない。巨大地震の時刻、原発事故を引き起こした電源喪失の時刻、津波の第一波・最大波の到達時刻、3月11日21時23分に政府が発令した「原子力災害特別法」にもとづく最初の避難指示と各自治体・地区ごとの避難の時刻、福島第一原発でのベントの実施・1号機3号機の水素爆発と事態が進み行く中で行われた避難指示拡大と二次避難、三次避難の時刻。そして、震災一ヶ月後に「事故発生から1年の期間内に積算線量が20ミリシーベルトに達するおそれのある」場所として、「計画的避難区域」と指定された地域の人々のあまりに遅すぎた避難の時刻——。原発事故にかかわる〈3・11〉の記憶は、じつは〈3・12〉や〈3・15〉、場所や地域によっては〈4・11〉や〈5・15〉のそれによって、さらには個々人が選択と決断を余儀なくされた複数の日付によって、上書きされている。すなわち、〈3・11〉として語られるべきことは、本来的には複数の日付とともに記録され、記憶されるべきものなのだ^[7]。

だから、〈3・11〉を破局的な出来事の日付として特権化し、そこからの〈復旧〉〈復興〉を説く言説は、福島県浜通り、とりわけ原発事故による避難対象区域が強いられた複雑な現実を捉え損ねてしまう。一般に記念される日付は、まさに〈8・15〉がそうだったように、記憶されるべき出来事が生じた日付を指し示す指標であると同時に、一つの区切り・再出発の起点としても意識される。しかし、そもそも再出発を構想すること自体が容易ではない、とにかく走りながら「再出発」について考えることを強いられている場所が、この国には厳然とあるのだ。時計は容赦ないほど着実に時間を刻み続けているのに、現に生きられる〈時〉が進んでいるとはなかなか感じられず、それぞれの身体に痛切に刻まれた日付の方に引き戻されてしまう。すでに2017年となり、カレンダーの上では東日本大震災・福島第一原発事故から6年以上の時間が経過する中で、それぞれの選択をした人びと、改めて選択をし直すことになった人びと、いまだに選ぶことさえ考えられない人びとの生活も休みなく続けられてきたし、もちろんいまも続いている。わたしが思うに、原発事故が人びとに強いた困難とは、時計が刻む機械的な時間と、しばしば混濁し、進んだとしても切れ切れだったり緩慢だったりした、生きられた〈時〉との決定的

なズレではなかったか。原発事故の忘却とは、このような時間意識の混乱と引き裂かれを生きさせられている人びとの存在がどれだけの人間に意識されているのか、ということではないか。

政府・自民党は、2015年6月に「原子力災害からの福島復興からの加速に向けて」（いわゆる「福島復興指針」）の改訂を閣議決定し、避難者・事業者への賠償打ち切りと住民の帰還促進を明確に打ち出した。同じタイミングで、福島県も自主避難者に対する仮設住宅・借り上げ住宅の提供を2017年3月で打ち切る方針を決定している（2017年度からは、月額所得21万4000円以下の世帯を対象に、「妊婦・子ども世帯」などの要件を満たした場合に限り、最大2年間の家賃補助——1年目は最大3万円、2年目は最大2万円——を行う制度が設けられた）。問題を複雑にしているのは、どうかこの時間意識のギャップを埋め合わせようと〈復興の加速化〉に向けて懸命に奮闘する人びとが一方にあり、他方には、事態の重大さを訴えたいがために、表象としての「フクシマ」を2011年3月の時間に縛りつけて語ってしまう人々がいることだ。もちろん根底的には、未だに原発事故の責任を明確化していない日本政府と東京電力の情報の隠蔽体質が、無用な対立と混乱を生み出している構造がある。

稿者にとって三瓶・門馬両氏をはじめとする富岡町歴史PTの活動が重要と思えるのは、東日本大震災・福島第一原発事故以降、地域と人々を引き裂き、地域内外の人々に分断をもたらし、個々の身体にも時計の針が示す時間と生きられる〈時〉との乖離を生みだしてきたものとは異なる時間の軸を構想しているからだ。企画展では、PTによる資料レスキューの成果を踏まえて、①富岡地区から上・下郡山地区、毛萱地区に至る区域、②上手岡から夜の森、本岡地区の区域、③小良ヶ浜地区から富岡地区に至る海岸沿いの区域という三つの区分を提示、それぞれの地域の人々が、近傍やそれ以外の地域とどのようなかかわりを取り結ぶことで生活を営み、暮らしを織り上げてきたかが紹介されてきた。記録を保全し後代につなぎ、地域の歴史を見つめ直そうとするPTの活動の結果、新たな視点で地域の歴史を語る事が可能になったことを意味しているのだろう。

町にゆかりのあった人々の時間意識が分断され切斷されつづける中で、分断以前の土台としてあ

った地域の過去を見つめ直すこと。公害研究の除本理史は、福島原発事故に特徴的な被害類型として、「ふるさとの喪失」を挙げている。具体的には、「自治の単位」としての地域が回復困難な被害を受け、そこでとりむすばれていた住民・団体・企業などの社会関係（いわゆるコミュニティはその一部）および、それを通して人々が行ってきた活動の蓄積と成果が失われ、その結果、「時代の推移に応じた変化をともしつつも継承されてきた」「地域固有の伝統・文化・景観」が失われる危険にさらされる^[8]。少し考えればわかる通り、こうした「ふるさと」の価値は経済的な損失としてカウントされにくい。しかも、まさにそうであるがゆえに、深刻な被害を受ける以前には意識されにくいことがらでもある。だが、原発事故による地域の歴史と文化の損傷に対するリドレス（＝補償、是正、原状回復）を求めていく際に、記録と記憶の双方から地域の価値を見定め、記述することはきわめて重要な作業となるはずだ。

それだけではない。富岡町歴史PTのもう一つの特徴は、複合災害とその記憶史料の調査と保全を明確に謳っていることである。2016年3月の企画展パンフレットの裏表紙に、「富岡町震災遺産保全宣言」が記載されている。「富岡町は、歴史的災害である東日本大震災と原子力発電所事故の影響拡大による原子力災害の風化を防ぐとともに、未来、世界に教訓を発信し経験を継承するために、町内で生じた或いは町民が有する等、富岡町に関する震災遺産の保全と有効なる活用を宣言する」と始まるこの宣言は、少なくとも「町が概して地域及び町民が復興を遂げたと判断できる状況」に至るまでは震災・原発事故関連の記録・記憶の集積を続ける、と声明している。巨大地震・大津波・原発事故が複合的に町を襲って以降、まさに地域を分断し引き裂いてきた時間それ自体をも含めて記録し記憶していく、ということ。歴史PTは、この途方もなく困難な企てを具体化するために、じつにさまざまな手法を駆使している。例えば、巨大地震・津波発生直後から原発事故による避難までの間、たった一日だけ災害対策本部が置かれた「富岡町文化交流センター・学びの森」の会議室には、刻一刻と集まってくる被災状況や避難所の人数、国からの避難指示を伝えるファックスなどが、その日の状態のままに机に載せられていた。会議室の後方には、アルミホイルにくるまれたま

ま炭化した非常食のおにぎりの残骸があり、ホワイトボードの脇には、ちょうど3月11日に行われていた安全講習会のポスターが貼り出されていた。その貴重で稀少な空間は、机上の書類の積み重なりまでふくめ、三瓶さんが体得していた考古学の発掘調査の手法(!)によって記録されていった。富岡町は定期的に自動車を巡回させて町の現状を録画し、youtube上にアップロードする試みをつづけていたが、それに加えて歴文PTでは、東北大学の研究グループと連携し、〈復旧〉〈復興〉の過程で取り壊され、片付けられ、整地されてしまうだろう震災遺構を3D映像で記録し、アーカイブ化することを企てている。いってみれば、複合災害に見舞われて以後、一度時間が止まり、そのあとも緩慢に動き出すことしか許されなかった時間をも含めて記録し、記憶に残そうとしているのだ。

こうした企ての重要性は、たとえば、2013年に東浩紀や開沼博らが提唱した『福島第一原発観光地化計画』(ゲンロン、2013年)や、2015年に福島県が有識者会議の議論を取りまとめて発表した「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設構想」と比較することで、より際立つことになる。後者について言えば、歴史学者も環境問題や博物館学の研究者も入らなかった「有識者会議」で、確かに「世界に向けた“FUKUSHIMA”の記録と記憶」の必要性が謳われ、「世界初の甚大な複合災害による史上類を見ない遺構や遺物、文書・映像等の保存が急務」だ、という問題提起はなされている(第1回会議資料^[9])。しかし「複合災害の実態と教訓の継承」とはいつても、いまだ原発事故の原因と経過さえ十分に明らかにされていない状況下で、「正確でリアルタイムな情報発信」「訪れる人々に効果的に伝える展示」「後世に正しく伝える教育」とは、いったい誰にとっての「正確」さであり、「効果」であり、「教育」なのか(「有識者会議報告書」^[10])。その証拠に、この「アーカイブ拠点施設」で収集される資料には、「原発誘致の経緯」や「原子力災害による避難」「原発事故への対応」は含まれるが、原発事故それ自体の記録がはじめから排除されてしまっているのだ。国土交通省がいわゆる〈被災三県〉にそれぞれ整備する「復興祈念公園」について検討した福島県の有識者会議が、「復興祈念公園の中あるいは側に、広島の平和記念資料館のようなアーカイブ拠点施設を造り、世界や次の世代に福島の悲惨な状況を一体

で示す」という提言を含めていたことは、たいへん象徴的な事態に思える^[11]。

カレンダーの上では複合災害から6年以上が経過した現在、資本や国家、核関連産業のまなざしを基準に、〈3・11〉と福島第一原発事故をめぐる〈見せられる記憶〉〈見せてもよい記録〉を選別し、統制的に作り上げようとする動きが加速している。例えば、2016年6月に刊行された『福島第一原発廃炉図鑑』(開沼博編、太田出版)は、帯の宣伝文句で「世界で初めて「福島第一原発廃炉の現場」の内実を正面から記録した出版物」だと謳っている。だが、この「正面から」という言い方が曲者だ。開沼は、一般には「福島難しい、面倒くさい」とする風潮があるという大前提を(ほとんど恣意的に)構成することで、〈当事者〉の立場から〈わかりやすく〉〈シンプルに〉事態を説き明かすという語りのポジションを占有する。その上で、まるで人々が福島第一原発事故をめぐる不安や不信を感じ、〈わからない〉と判断を留保すること自体が罪であるかのような印象を作りあげること余念がない。2016年7月には、福島県三春町に、福島県・日本原子力研究開発機構(JAEA=原研)、国立環境研究所(NIES)が同居する「福島県環境創造センター」がオープンしたが、併設の交流棟「コミュタン福島」は、「展示やワークショップでの体験を通して県民の不安や疑問に答え、放射線や環境問題を身近な観点から知り、環境の回復と創造への意識を深めること」を目的に、小学校5年生程度を想定して作られた展示施設である。そこでは、福島第一原発事故以後の環境影響、除染作業の進捗状況、再生可能エネルギーへの取り組みなどが説明されるのだが、福島の自然・文化・伝統のイメージが強調される一方で、〈3・11〉以前の時間は見事なまでに捨象されている。あたかも〈3・11〉を紀元ゼロ年とする、新たな歴史=神話の「創造」が、最新のテクノロジーを駆使したスペクタクルと適度な手作り感を感じさせる展示とによって、訴えられているかのようだ。

そうした状況が進行する一方で、富岡町の歴文PTは、原発事故以後の施策によって葛藤と亀裂、断絶と分断が生まれてしまったその時間まで引きこめて、地域の「震災遺産」として記録と記憶を集積していくことを企てている。注目すべきは、2017年3月に富岡町が「富岡町震災遺産保全等に

関する条例」を策定、公布したことである（2017年3月10日、条例第3号）^[12]。全7条から成る同条例は、「富岡町及び富岡町民が経験し、影響を受けた所産等の資料」を「震災遺産」として定義、「口述記録」や「景観等」を含め、町としてそれら「震災遺産」を保全・管理し、積極的に公開・発信していくことを定めている。つまり、歴文PTが着手した活動が地方自治体としての町の公的なものとして制度化されたことで、富岡町は、「震災遺産」を町として認知し、電子データを含めたそれらをアーカイブ化して、積極的に管理運用していく責務を負ったことになる。こうした富岡町の企ては、この人類史上稀に見る複合災害にかかる対抗的な語りを構想するうえで、決定的に重要な価値を持つはずだ。時計で計測できる均質な時間と、原発事故の被災地であるからこそ感受される心理的な時間。富岡町歴文PTの企ては、長いスパンと短いスパンの双方のレベルで地域の記録と記憶に焦点化することで、その二つの時間をもに見渡せるような、もう一段別のレベルの時間意識を作りだそうとしているのではないか。私の言い方で言い直せば、一つの地域の歴史と来歴を語るうえで、複合災害だけに焦点化するのはない・むしろ複合災害とそれ以後の時間を含めた歴史を構想し直すような、奥行きのある・立体的な時間意識を構造化しようとしているのではないか。そうした試みの重要性は、2017年4月1日の避難指示解除以後という新たな時間軸が加わったことで、あらためて確認されるべきではないかと稿者は考える。「避難指示解除」はそれ自体一つの区切りに過ぎず、まだ何も終わったわけではないし、始めなければならないことは他にも多くあるからである。

1990年代以降に提起された記憶をめぐる議論は、過去の記録と記憶に対し、それらを位置づける枠組みへの問題意識と合わせ徹底して誠実に向き合うことこそが、より望ましい未来を開く出発点であるという認識を確認し、上書きしてきた。その意味で、富岡町歴文PTの試みは、現在の人文科学・社会科学の知的状況に対しても、きわめて重要な問いを投げかけていることは間違いない。

3. 歴史とアートのはざまで——「福島・文化・文化財ツアー」から

2017年2月、会津若松市の福島県立博物館を会場に「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」成果展が開かれるタイミングで、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受けた「はま・なか・あいづ連携プロジェクト」主催の現地視察ツアー「福島・文化・文化財～被災地のミュージアムと文化財のこれから～」が開催されることを知った。都合で3日間のツアー全行程には参加できなかったが、それでも富岡町以外の被災文化財の状況も知りたくて、急いで事務局に参加を申し込んだ。

福島県立博物館としては2016年の「震災遺産を考える」に続く2回目の企画展となった今回は、同博物館内に事務局を置いた二つのプロジェクトによる共同＝協働展示という形式が採られていた。といっても、よくある連携事業のように、二つの企画展それぞれに別の展示空間が割り当てられた、というわけではなかった。会場に入ると、いわゆる「震災遺産」に当たるものと、2012年以降に福島県内各地で活動したアーティストたちの作品とが、文字通り並置されていたのである。

強大な津波の力によってひしゃげてしまった橋の欄干や折れ曲がってしまった交通標識、避難所や仮設住宅での困難と自律的な共同空間にかんする記録や写真、福島第一原発での事故処理や警戒区域への立ち入り時に使用された白いタイベック・スーツを着たマネキンと、除染廃棄物を詰めるフレキシブルコンテナバッグの現物と正対する位置やその周囲に、写真やオブジェ、映像のインスタレーションが配置される、ある意味で挑戦的かつ挑発的な展示空間。そこにあったのは、他のツアー参加者が口にした言葉を借りれば、まるで被災地で収集・保全された「震災遺産」たちが、レディ・メイドのオブジェのようにさえ見えてしまう空間だった。この圧倒的な不謹慎さというか、〈芸術／アート〉という枠組みが持ち込んでしまう強い文脈喚起力をどう考えるかは、2日間のツアーを通じて一貫して問われていたように思う。

ツアーの行程は、この企画のファシリテーターを務めた映像作家・藤井光氏が製作したドキュメンタリー映画『ASAHIZA 人間はどこへ行く』

(2013年)の上映から始まった。舞台となった映画館・朝日座は関東大震災の年に現在の南相馬市原町区に開館、商業的な映画館としては1991年に

その役目を終えたものの、いまなお地域の方々によって大切に守られ、不定期で映画上映が続けられている。映画『ASAHIZA』では、そんな映画館をめぐる証言と記憶の語り、折り目正しい映像で綴られていた。

さまざまな年代、さまざまな立場で「朝日座」にかかわった人々が、それぞれの個別的な身体に紐付けられた記憶を語る。誰と見たか、何を見たか、どのように見たか。映画館なのに映画など見ていなかったこと、映画館と盛衰をともにした商店街のこと。その二つをどうにかともに復活させようと知恵を絞ったが叶わなかったこと。ともに語り合い、確認しあうことができる記憶は、ひとをしみじみと笑顔にし、元気づけてくれる（おそらく逆にそうであるからこそ、ひとが孤独に抱え込まなければならない記憶は、鋭い刃で、そのひとの心と身体に突き刺さり続けるのだろう）。複数の身体から紡がれ続ける言葉が織り上げる時空は、いっさい日付に関係するインデックスが示されないまま押し拡げられ、観る者から少しずつ時間の観念が遠ざけられていく。そんな語りの持続に心地良く身を委ねていると、突如として画面は大型バスの車内に切り替わる。座席前列中央に固定されたカメラは、誰の表情も映し出すことなく、マイクを握った男性が、ここから20キロ圏内に入ります、ここから小高に入ります、と東京電力福島第一原発事故による避難区域への視察者を案内するシーンが始まるのだ。

この暴力的な切断がもたらすショック体験は、この映画を観る身体に、2011年3月以降の出来事が何を切断し、被災し避難を強いられた浜通りの人々にどのような亀裂がもたらされたかを想像させる契機となっている。『ASAHIZA』は、〈3・11〉とそれ以後の出来事を語る（と称する）言葉やイメージをあえて示さずに、それでいて、〈3・11〉以後にカメラから撮影される側になってしまった人々が生きた／生きさせられた時間の意味を、痛切に問い返すことが目指されていた、と言えるのだろう。

歴史資料と芸術表現との緊張関係は、ツアー二日目の行程の中でより具体的に問われることになった。福島県立博物館からバスに乗り、途中福島駅で2日目からの参加者と合流、南相馬市へと向かう。まずは南相馬市立博物館で開催中だった企画展「櫻井先生の集めた浜通りの花々」を見学。

南相馬市在住の櫻井信夫氏が長年調査・収集した、震災前の浜通りの自然と生態系を伝える貴重な植物資料としての押し花標本が、福島大学の協力でいかにレスキューされたか（これも「文化財レスキュー」だ）説明を受ける。その後、南相馬市の学芸員・二本松文雄氏を講師に迎え、旧小高町（現在の南相馬市小高区）が蒐集した民俗資料が保管されていた市立福浦小学校に入る。このツアー当時、福浦小の空き教室には、400点を超える資料が4室に分けて仮置きされていた。まだ整理もままならないという感じで、農具や漁具のような生業にかかわるモノや、真空管ラジオや電話機などの生活用品が雑然と並べられていた。市内の別の小学校にあった学校関係の備品や物品も、教室や廊下に搬入されていた。福浦小は、東京電力福島第一原発事故で警戒区域に指定されて以後、6年以上にわたって、本来の校舎での授業は再開されていない（2017年4月から、旧小高区の4小学校が合同で、小高区小高小学校で授業を行っている）。

職業柄、学校に入ると、どうしても視線は教職員のそれになる。資料が置かれた部屋の黒板には3月11日と12日という二つの日付が書き残されていて、〈明日〉も学校に来ることが考えられていたのだな、と胸が締め付けられるような気分になる。持ち込まれた資料棚の陰に隠れて、給食と清掃の当番を記した掲示が見える。廊下には、新年度に使う予定だったのだろう教科書が、積み上げられた段ボールから顔を見せている。窓から職員室を覗くと、電話の傍らに、黒々とした太いサインペンの文字で、「避難所の確認」と書いたペーパーが放置されていた。

つまりここには、質の異なる複数の時間が封じ込められている。地域に生きた先人たちが日々使ってきた、受け継いできた、愛でてきたモノたち。それらは、生活スタイルの変化によって一度は不必要なモノと判断されたが、また再び行き場を見失ってしまったモノたちである。そして、それらを取り囲むフレームには、決して訪れることのない2011年3月12日以後の平穏な未来を反実仮想的に想像させるモノたちが、ほぼそのままのかたちで冷凍保存されている。モノそれ自体からだけでなく、モノが置かれた場所＝枠組みからも、いくつもの物語が聞こえてくるようで、その乱反射する記憶の現場で稿者は、どうしてもよいかわからず、思わず立ち尽くしてしまった。

幾重もの時間性が折りたたまれたその空間／場所の意味をどう考えるか。福浦小で見たモノたちは、とりあえず緊急避難的に集められたものだ。つまり、その空間自体がたぶんに偶然の産物である。ある人々にとってそれらは、使われなくなった不必要なモノたちの集積と見えるだろうし、別の人々にとっては、学校再開にとっての妨げとさえ意識されるかもしれない。言ってみれば、それらのモノたちは、ひとつひとつの由来や来歴、保全されてきた意味と理由を語る言葉と共起しない限り、〈史料〉としての意味を受け取り直すことはないのである。

おそらく、こうした考え方は、〈芸術／アート〉にかかわるある種の発想と鋭く対立することになるはずだ。マルセル・デュシャンの例を想起するまでもなく、〈芸術〉という言葉の枠組みや〈ミュージアム〉という場所は、モノを作品化する強力な磁場としてある。だから、2017年2月の福浦小学校という空間を、それ自体として〈芸術〉だと意味づけること、いくつかの偶然によって成形された〈事件〉としての作品だと見なすことは決して不可能ではない。だが、福浦小の空間全体を、一種の体験的なインスタレーションだと紹介されたとき、そこに封じ込められた複数の記憶のどれかと実際にかかわりを持ってきた、現実にその記憶を生きていた人びとは、いったいどのように感じるだろうか。地域の歴史を伝えるよすがになれば、と寄贈・寄託されたものたちが緊急避難的に仮置きされた場所そのものを、〈これがアートです〉と見せられたとき、そのモノたちにゆかりある人びとは、いったいどのような感情・情動に襲われるだろうか。

一般的に〈芸術／アート〉は、挑発的なモノの見方・捉え方を提示することで、既存の常識や固定化された認識を揺さぶる役割を持っている。しかし、こうした複数の記憶・複数の時間を喚起する場所自体を〈芸術〉として括りだし、作品として意味づけてしまうことには、また別種の不謹慎さがあると稿者には思われる。なぜか。それが作品化された瞬間に、そこに集められた個々のモノたちが、作品を構成する要素の一部として包摂され、ひいては、膨大な作品たちによって構成される〈芸術〉という全体を形成する一つのピースとなりおおせてしまうからである。〈芸術〉作品というラベルが貼られることで、個々のモノがそれぞ

れ辿ってきた歴史性、日々の暮らしの中でどのように使われ、どんな人々に使われ、なぜそれらがここにあるのかという来歴が後景化され、観る者の意識から遠ざけられてしまうからである。「震災遺産」をレディ・メイドのオブジェと見なすことの危うさは、そうした問題とかがわっている。

もちろん稿者は、東日本大震災や東京電力福島第一原発事故を〈芸術／アート〉として表象・表現すべきでない、と言いたいのではない。大事なことは、〈芸術／アート〉という語彙なり観念なりが、その場所、そのモノ、その文字や語りに刻まれたいくつもの声を聞かないために用いられているのなら、それは批判されるべきだ、ということだ。もちろんそのことは、〈芸術／アート〉のジャンルとしての文学についても同様である。声の聞き方、耳の澄ませ方には、それなりの作法と心構えとがあってしかるべきだからである。

謝辞

本研究の構想・実施にあたっては、大妻女子大学名誉教授・高木不二氏、日本大学教授の高榮蘭氏、福島県富岡町学芸員の三瓶秀文氏・門馬健氏との継続的な対話が不可欠だった。また、本稿の執筆にあたって、門馬氏から貴重なコメントを頂戴した。ここに記し、あらためて心からの謝意を表したい。また、ツアーへの参加に際してお世話になった福島県立博物館、「はま・なか・あいづプロジェクト」関係者各位にもお礼を申し上げたい。

付記

本稿には、稿者が国際日本文化研究センター研究プロジェクト「戦後日本文化再考」での共同報告「記録をつなぐ、記憶をつなぐ——福島県富岡町の試み」（2016年8月20日）で報告した内容を含んでいる。本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（S2820）の成果である。

注

- [1] 木村朗子. 世界文学としての震災後文学. 社会文学. 2015, 42, p.120-132.
- [2] 日野行介・尾松亮. フクシマ6年後 消され行く被害 歪められたチェルノブイリ・データ. 人文書院. 2017.
- [3] 森岡卓司. 他者としての「言葉」——東日本大震災後の言説状況と戦後批評を巡る試論.

山形大学人文学部研究年報. 2014, 11, p1-18.
[4] 山本昭宏. 核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ. 中公新書. 2014.
[5] 富岡町ほか. ふるさとを想う まもる つなぐ～地域の大学と町役場の試み～. 2017.
[6] 日本政府は、富岡町については、2017年4月1日に「帰還困難区域」以外の避難指示を解除した。
[7] 2011年4月11日、日本政府は事故発生後1年で積算線量が20ミリシーベルトに達する地域を「計画的避難区域」とし、「葛尾村、浪江町、飯館村、川俣町の一部、南相馬市の一部」を指定した。また、「計画的避難は概ね1ヶ月を目途に実行されることが望まれます」とし、5月15日から政府指定にもとづく「計画的避難」が開始された。該当地域の住民で、それ以前に自主的避難を行った人々も少なくなかった（経済産業省ホームページ「計画的避難区域」と「緊急時避難準備区域」の設定について）
http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/20110411_keikakuhinan.html .

[8] 除本理史. 公害から福島を考える. 岩波書店. 2016.
[9] “東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議 第一回会議資料”. 福島県
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/125447.pdf>, (参照 2017-5-31)
[10] “東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設の機能, 内容等について(報告)”. 福島県.
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/130698.pdf>, (参照 2017-5-31)
[11] “福島県における復興祈念公園のあり方【基本構想への県提言】”. 福島県.
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/162655.pdf>, (参照 2017-5-31)
[12] “富岡町震災遺産保全等に関する条例”. 富岡町.
http://public.joureikun.jp/tomioka_town/reiki/act/frame/frame110001235.htm, (参照 2017-6-11)

Abstract

After Great East Japan Earthquake and TEPCO's Fukushima No.1 Nuclear Power plant accident, some scholars of Japanese literature began to reevaluate "Genbaku Literature", works based on the Atomic-Bomb event in Hiroshima and Nagasaki. However, it has not been examined how people describe and represent "Fukushima" in detail. Many victims suffering even now, but The Japanese government want to make national narrative of reconstruction toward 2020 Tokyo Olympic games. In this study, I discussed about how preserve for cultural heritage and historical documents, and how succeed the memories of regional activities before/after 3.11 in Hama-dori area of Fukushima prefecture.

(受付日：2017年6月11日，受理日：2017年6月22日)

五味 典嗣 (ごみぶち のりつぐ)

現職：大妻女子大学文学部日本文学科准教授

慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得退学，博士（文学）

専攻領域は近現代日本語文学・文化研究。現在は、おもに戦争・アジア太平洋戦争期の日本語による戦争や戦場の表象とメディア統制とのかかわりについて考えている。主な著書：『言葉を食べる——谷崎潤一郎，1920-1931』（世織書房，2009年），『コレクション・モダン都市文化 96 中国の戦線』（編著，ゆまに書房，2014年），『谷崎潤一郎読本』（共編著，翰林書房，2016年）ほか。